

長生 (榮能春延壽)

長生の家こそ

老せぬ門の若々と

若水汲みのあさ若き

お湯殿始庭かまと

煙ぞ今日の初霞

棚引きにけり

一卜刷毛に

絵の書初の

熨斗宝珠

玉の櫛笥に髪飾る

白紅と絵元結

結ぶ縁の妹と背を

命長かけ諸白髪迄

変はらぬ中と睦し月の着衣始

流行模様の伊達小袖

仇と色とを濃い紫の

十九や二十は色盛り

なまめく風を姿見に

写せば恋の十寸鏡

月の眉墨

花の顔

雪の肌への衣紋つき

かいどりしとど振る袂

ゆらな手元に爪琴の

菜露と言ふも

草の名

茗荷と

言ふも草の名

富貴自在徳ありて

冥加あらせ

給へや

春の花のきんぎよく

花風楽にりゅう花苑

りゅう花苑の黄鳥は

同じ

曲を囀る(ミン)

弾初うとう連れ唄や

そのいろ糸の音にかよう

峰の松風松はやし

四海波風静にて

国も治まる代のためし

射初長閑に弦の音

射塚も董

鼓草

春の姿の山笑う

笑う家には

福引の

手に糸遊ぶ綱手縄

真紅の色の厚房や

飾り立てたる黒の駒

誰言はねども御召ぞと

対の口取鮫鞘を

踵うたせて落とし差

揃ふ奴の聲そるへ

二人つん 連立ち

サア 行くべいサア行くべい

嬉し目出度のナ日の出まばゆき

金覆輪の

鞍は梨地の鐙にあふり

手綱かい繰りしつとん

りうぐちきりを乗廻し

くるり くるくる

車にあらぬ輪乗の拍子と

轡の音がりん がら

りんがらがら

はいどつ

はい

扱さて見事なお馬乗初

勇ましき

勇む春駒蘆原の

国も目出度き青海波

龜の齡の萬々歳

盡きせぬ御代こそ目出度けれ。